

「苦しみを受ける者の姿勢」

ピリ2:1-6

ですから、キリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあ、御霊の交わりがあ、愛情とあわれみがあるなら、あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

<序論：苦痛（苦しみ）とは>

創世記3章で善悪の知識の木の実を食べて善悪の判断の主体となった人間たちは皆、自分が神になり、王になって生きようとします。そのような人間は、他の人が自分よりも優れていて上にいるのを嫌い、耐えることができません。それで何とか他の人を引きずり下ろそうと、踏みつけて上がろうとします。そのような自己中心の属性が心と考え、骨と骨髄、血の中にまで根付いているのです。

苦難(苦しみ)、苦痛というものは何でしょうか？ 私の思ったとおりに、私が望むようになっていないとき、私が力として、価値として考えていたものが私から切り離されていくとき、それを苦しみ、苦痛に感じるのです。結局、苦しみの基準も「私」なのです。

<本論>

今日の本文3節のみことばの中には非常に重要な意味が含まれています。原語のままを解いて説明すると、自己中心、すなわち利己心によって争いが生じ、争いによって分離が起こるということです。そのように自己中心によって生きることは、無駄な栄光を追うことだということです。まるで創世記3章の事件を話しているようではないでしょうか？ 神のように、いや自分が神になって生きようと、善悪の知識の木の実を食べたアダムとエバに、互いを責める分裂が生じ、結局、神様の栄光のために造られた人間たちが、神様と断絶され、無駄な栄光を追って生きるようになったのです。

ピリピ教会の内にそのようにローマの市民権者と権力階層の高慢による分裂の兆しがあったとみられます。だからパウロは引き続き「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」と勧めているのです。ここで「へりくだって」と解釈した単語は「謙遜に、完全にひれ伏して屈服する」という意味を持っています。当時、ローマの統治下にいた人々にとって謙遜とは、今日のように基本的に備えなければならない美德ではなく、奴隷根性から始まる「屈辱」と「卑屈さ」を意味するのです。そのような彼らに理解できない謙遜な模範を見せてくださった方がイエス・キリストです。

その説明が5節から8節までのみことばです。

ピリ2:5-8

- 5 キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。
- 6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、
- 7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、
- 8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

みんなが王となり、自分の思いのままに生きているこの人間の世界に、真の王であるイエス様はしもべとして来られ、多くの人に仕えて贖いをするために十字架で死ぬまで服従されました（マル10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。）。

十字架はイエス様もできれば避けたかった苦難の場でした。それにもかかわらず、神のみこころに従い、父の栄光を示されました

（マル14:36 そしてこう言われた。「アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」、

ヨハ17:4 わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上であなたの栄光を現しました）。

イエス・キリストの十字架の苦しきは、背きと罪のなかに死んでいた私たちを生かし

（エペ2:1 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、）

神と敵であった私たちを和解された者としてくださったのです

（ローマ5:10 敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです）。

そのように、私たちはすべての名にまさる名を、すべてのものがひざまづく名であるイエス・キリストを主と告白する者となりました。それは、イエス・キリストが私となってこの世を生きたように、聖霊様が私の中でイエス・キリストの人生を生きるようされるということです。それが自分を否定し、自分の十字架を負ってイエスに従う人生です

（マタイ16:24 それからイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい）。

ピリ2:12-13

- 12 こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私ともにいるときだけでなく、私がない今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。
- 13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。

「恐れおののいて自分の救いを達成するよう」ということは、私たちに、がんばって努力して自らを救われなさいということではなく、すでに得た救いの人生を恐れおののいて生きなさいということです。その人生には明らかに苦しみもあります。しかし大丈夫です。人生の主人である神様が、ご自分のみこころのままに志を立てさせ、事を行なわせてくださるからです。

<結論>

生きていて力ある、みことばであるイエス様が私たちの中に入って来られ、なさっていることがあります。序論に申し上げたように、心、考え、関節、骨髄にまで根付いた「私中心」のすべてを刺し貫き、切り取るのです。そのようなものが私から切り取られるときに痛いのです。つらいです。麻酔して下さらないのです。しかし、その苦しみを過ぎて神様に従う者、神様絶対依存的存在として立つようになるのです。

I ペテロ4:12-14、19

- 12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っははいけません。
- 13 むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。
- 14 もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。
- 19 ですから、神のみこころにより苦しみにあっている人たちは、善を行いつつ、真実な創造者に自分のたましいをゆだねなさい。